

吹奏楽部を核とした地域貢献活動

吉井 千周, 下田 克久^{*1}, 小原 聡司, 中村 裕文, 岩熊 美奈子

Regional Contribution by Wind Ensemble Club Activities

Senshu YOSHII, Katsuhisa SHIMODA, Satoshi OBARA,
Hirofumi NAKAMURA and Minako IWAKUMA

(Received October 1, 2010)

Abstract Nowadays, applicants are gradually decreasing in most National Colleges of Technology (NCT) due to a decline in the birthrate in Japan. Many NCTs, including Miyakonojo NCT, have already tried to secure applicants by introducing their unique academic or extracurricular activities to school children in the region to attract them to come to NCTs.

This paper discusses how Miyakonojo NCT Wind Ensemble Club contributes to having people in the community get interested in our college. A wind ensemble club is one of the most popular clubs in junior high schools in Miyakonojo area as well as in other regions of Japan. Therefore, the wind ensemble club could give some positive impression to schoolchildren, especially to those who are the members of the brass band club of their junior high school, by giving an excellent performance in contests. The club could also do public relations on behalf of our college by volunteering to participate in various communal events.

Keywords [Regional contribution, Club activities, Wind ensemble]

1 はじめに

都城工業高等専門学校(以下都城高専)吹奏楽部は2010年で創部45年を迎えた都城高専でも活動歴の古い部活動の一つである。総勢56名の部員のうち大半の32名が本科1年から3年までの低学年生で構成されているにもかかわらず、例年開催されている全日本吹奏楽コンクール(以下AJBAコンクール)宮崎県大会では大学の部に出場し県内の他大学を押さえ九州ブロック大会進出という好成績を残している。また都城近辺の老人ホームでの慰問演奏、地域のお祭りへの出演、近辺小中学校での指導など積極的な地域貢献活動を行っている。こうした本校吹奏楽部の様々な活動は、入試志願者増にも大きく貢献している。

本稿では吹奏楽部が高専のPR効果のみならず、地域貢献活動に効果的であることを本校での事例を用いて報告し、本校のみならず全国の高専吹奏楽部の活動についてその効果と問題点について考察を加えたい。

2 高専の課題と沖水教育特区構想の立案

2.1 15歳人口の減少と中期目標

少子化が進む昨今、高専においても学生の確保に対策を講じなければならない時代となった。いずれの高専においても独立行政法人国立高等専門学校機構中期目標前文に記されている「国立高等専門学校に様々な役割が期待される中、15歳人口の急速な減少という状況の下で優れた入学者を確保するため

には、5年一貫のゆとりある教育環境や寮生活を含めた豊かな人間関係など、高等学校や大学とは異なる高等専門学校の本来の魅力を一層高めていかなければならない¹⁾という要請に可及的速やかに対応しなくてはならなくなっている。学生の理系離れ、入学者の減少に伴う大学法人の倒産、そして大学の閉校は高専にとっても決して他人事ではない。

特に都城高専においては18歳人口の減少という全国的な学生確保の問題に加え、近辺の中等教育・高等教育をめぐる状況が激変している。そのため、上述した課題に可及的速やかに対応すべき時期にきている。

2. 2 公立中高一貫校の新設

都城では宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校(以下泉ヶ丘高校)が平成22年度より1学年40名を定員とした附属中学校を設置し中高一貫校となった。泉ヶ丘高校附属中学校の生徒は泉ヶ丘高校理数科への進学を原則とし、少数精鋭で難関大学への進学を目指すという指導方針である。そのため宮崎県内で都城高専に進学を希望していた学生が中学校の段階で泉ヶ丘高校に進学する可能性が高い。

都城地区だけでなく国公立の中高一貫教育の増加は全国的な傾向であり、志願者の奪い合いは都城のみならず他地域の高専においても深刻な問題として立ち現れていると考えられる。高度な技術者を養成するという高専のカリキュラムのメリットをアピールした上で、中期目標中²⁾の「高等学校や大学とは異なる高等専門学校の特性や魅力について、中学生や中学校教員、さらに広く社会における認識を高める広報活動を組織的に展開することによって、十分な資質を持った入学者を確保する」ことが急務となっている。

2. 3 南九州大学の移転

また泉ヶ丘高校附属中学設置問題に加えて新たな問題も浮上した。高等教育機関が本校一校だけであった都城地区に理系の南九州大学環境園芸学部が平成21年度に移転し、さらに平成22年度より人間科学部を開設した。専攻こそ異なるものの旧来本校が果たしてきた企業への技術提供・社会貢献活動において競合するようになった。

この南九州大学の移転に際し都城市議会は全会一致で誘致採択、地元商工会もその誘致を歓迎した。そもそも南九州大学の移転先は2004年に撤退した宮崎産業経営大学跡地であり、その利用について都城市では市長選などを含み政治的争点となっていた。そのため地元商工業者の南九州大学によせる期

待は大きく、私立大学の撤退をくり返さないよう市有地の無償貸与を含め官民一体となった支援表明がなされている。

都城高専への地元産業界及び市民からの支持と期待は南九州大学移転後も変わらないものであると信じていたい。だが付近に高等教育機関の強力な競争相手ができることは本校の地元地域貢献活動についても大きくその方針を変えるべき時期に来ているように思われる。

2. 4 沖水教育特区構想の発案

こうした都城地区の教育環境の変化とは関係なく、これまで本校では社会のニーズに応えるために高度な技術人を育てるという高専の理念を保ち、また地元企業に技術提供を行い地域貢献策を講じてきた。また例年出張授業や公開講座を地域貢献策の一つとして積極的に行ってきた。だが上述したような都城地区の教育環境の変化、また各高校・大学が中高大連携による高度化教育の変化が活発化する中で、教育・研究内容以外の活動についても積極的にアピールする必要が生じてきたといえよう。

そうした課題に応える一つの手段として、都城高専では、学校の所在地である沖水地区の幼稚園及び幼稚園・保育園・小学校・中学校と共同し、一貫した教育プログラムを高行う沖水教育特区構想(以下、「沖水教育特区構想」)をスタートすることを決定した。³⁾

沖水教育特区構想の特徴は二つある。第一に最長20年間にわたる長期的な教育を沖水地区で完結し、沖水地区をものづくり人材の拠点として特色ある教育プログラムを作ること、第二に学生自身が主体的に地域の学校や地域共同体に参加し、今までは主として教職員が行っていた高専アピールの役割を担うことである。特に後者は受験生と年齢が近く地域社会を熟知している学生が中心となってこの事業をすすめることで高専の魅力をより身近な視点から伝えることができるものとして期待されている。

もちろんこれまでも本校においては学生を主体とした地域貢献活動は常に行われてきた。しかしながら、そうした活動について学校側が正式な形でバックアップするという事は非常に少ないものであった。例えば都城高専には県内唯一のジャグリング同好会があるが、老人ホームを含む慰問公演、各種イベントでの公演でその技を披露するなど人気も高いものの学校の地域貢献活動としての正式なポジションは得られなかった。今回の沖水教育特区構想では「4 クラブ活動の交流」「5 生徒会や学生会との交流」により学生同士の交流を学校が正式にバック

アップすることで、地域社会に貢献するだけでなく、高専に進学を考える中学生に大きくアピールするものになることが期待される。

表1 高専を核とした沖水教育特区構想

| |
|--|
| 1. 目的 |
| 都城高専を核とした沖水地区の小中高専一貫教育特区を構築し、都城圏域からの人材を育成するためのプロジェクト |
| 2. 教育特区の具体的な実践内容 |
| 1) 小学校・中学校・高専と沖水地域との連携による一貫教育を行う |
| 2) 高専教員の小中学校への出前授業と教材研究 |
| 3) 小中高専教員交流会の開催 |
| 4) クラブ活動の交流 |
| 5) 生徒会や学生会との交流 |
| 6) ボランティア活動の実践 |
| 7) ものづくりの体験教室 |
| 8) 沖水地区の企業とのコラボレーション教育 |
| 9) 留学生との交流(モンゴル・ブラジル・ラオス・マレーシア・インドネシア) |
| 10) モンゴルとの国際交流(小中高11年制)の充実 |
| 11) 沖水まつりの拡大と充実 |
| 12) 都城市モンゴル友好協会との連携強化 |
| 13) 中学校のマルチメディア教育支援 |
| 14) 幼稚園・保育所との連携 |
| 15) 中学生の夏休み学力向上事業のサポート |

を高専アピールの場としても活用する沖水教育特区構想において現在中心的な役割を担うことが期待され、活発に活動している部活動の一つが吹奏楽部である。

3 教育機関における吹奏楽

ここで日本の学校教育における吹奏楽部の現状を概観し、次いで全国の高専における吹奏楽部の現状を概観してみよう。

3. 1 高専以外の教育機関における吹奏楽

2009年現在高専を問わず小中高大学のほとんどの学校に吹奏楽部(もしくはブラスバンド部)が設置されている。各校における吹奏楽部の活動の中心は、1 全日本吹奏楽連盟(All Japan Band Association:以下AJBA)に加盟しAJBAコンクールに出場すること、2 それぞれの吹奏楽部が個別に開催する定期演奏会、の2つである。⁴⁾中でも夏休みに開催されるAJBAコンクールについては、世界最大のアマチュア音楽コンクールと言われ中でも東京杉並にある普門館で開催される中学・高校の全国大会は、文化系の甲子園と呼ばれるほど熾烈かつ過酷な競争を繰り広げている。多くの学校でAJBAコンクールへの出場が甲子園出場と同様、それ以上のPR効果があると認識されたことから、私立高校を中心に各校のPR効果をねらって吹奏楽部の指導が過熱の一途をたどり、優秀な指導者の招聘が盛んに行われている。甲子園出場を目指す高校が優秀な中学生を確保するように、各校とも指導者の獲得、楽器の整備、小学校・中学校からの推薦入学による部員の確保など多くのコストを割くようになった。⁵⁾宮崎県においても都城商業高等学校と宮崎学園高等学校が全国大会出場常連校として有名であり、指導者の確保、楽器の整備などを通して両校とも宮崎だけでなく鹿児島・熊本からも入学志願者を集めている。

芸術の一分野である音楽が賞取りレースを目的にすることは決して喜ばしい事態ではない。それでも学生の演奏技術の習熟度を示す一つの指標としては有用であり、学生はコンクールに出ることで自らの演奏技術のレベルアップを目指すという効果がある。また学校関係者が中心となる定期演奏会とは異なった客層に自分たちの演奏する音楽を聴いてもらうことにも学生は価値を見いだしている。

3. 2 高等専門学校における吹奏楽部活動の課題

ところが全国の高等専門学校の吹奏楽部に目を転

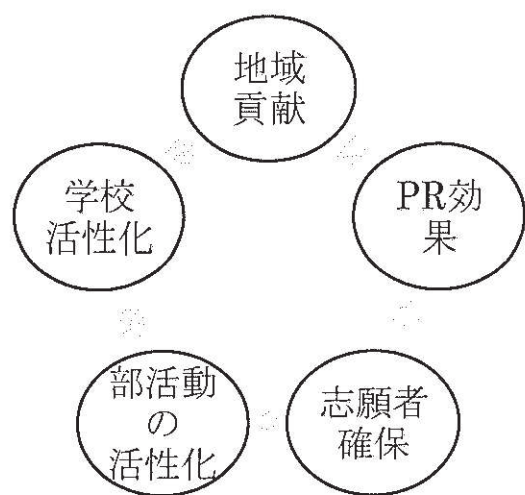


図1 沖水教育特区構想における部活動の位置づけ

こうした学生の主体的な活動による地域貢献活動

じてみると、上述した各教育機関における吹奏楽部の状況とは異なり十分に活動を行えない現状がある。

A J B Aコンクールでは県大会、ブロック大会と勝ち抜き全国大会にコマを進めるが、県大会を突破しブロック別大会まで進むことができる高専は少ない。ブロック大会出場の回数が吹奏楽部の活動の全てを語るものではないにせよ、高専吹奏楽部が上位大会に進出できない理由は端的に言えば高専吹奏楽部にある以下の4つの共通した課題によるものと考えられる。

まず第一に各高専では音楽の専任教員が不在であり常駐の指導者を確保することが困難である。そのため、学生のレベルアップが他の教育機関ほど望めない。

第二に多くの高専には音楽室が用意されていないため練習場所の確保が困難である。指揮者をどの楽器パートの位置からでも見ることができる階段教室も十分になく、また吸音設備のない教室で練習する学校が多い現状では自らの音を自分の耳でチェックするという基本的な練習さえも十分に行うことができない。

第三に部活動を支える楽器が教育備品として購入できる高校・大学と異なり学生の数に見合う十分な数・種類の楽器が確保できない。30人編成の中編成⁶⁾の場合、学生が利用する楽器の価格だけで約1,500万円の初期費用がかかる。本校を含め各高専では20年以上前に製造された耐用年数をはるかに経過した楽器を利用しており、小学校、中学校、高校のように高額な楽器を定期的買い換えることができない。今日高専教育費の予算削減が進む中、各校とも楽器の購入には頭を痛めている。加えて楽器に関しては購入した後もメンテナンス代金・消耗品代として年間約20万円が必要となる。コンクール上位を目指し、楽器を長年利用するためにはランニングコストも欠かすことができない。

これらの課題はいずれも高専の金銭的・カリキュラム上の制約に影響を受けているものである。だが、上述したような制約に加え、高専の立場そのものに帰結する大きな第四の課題が存在する。それは15歳の1年生から22歳の専攻科生までの学生が参加する高等専門学校の吹奏楽部は、大学の部での出場となり、高校生相当の年齢が中心の団体であったとしても大学生と同じ部門で賞レースを争わなくてはならないという課題である。

打楽器・弦楽器(コントラバス、ハープ、ピアノ)を除くと息の吹き込みによって楽器を演奏する木管・金管楽器を中心とする吹奏楽では、大学生と圧倒的に体力的な違いがある。大学生に比較して肺活

量が小さく大音量が出せずブレスコントロールが十分でない高校生相当年齢のメンバーを中心として構成される高専生バンドは大学の部で賞レースを争うには圧倒的に不利となる。加えてA J B Aコンクール県大会の行われる夏季休暇中には本科5年生と専攻科生2年生は卒業研究が平行して進められているためコンクールに出場ができないケースも多く、低学年生も寮規則や指導規則にしばられるため大学生のように多くの時間を練習に割くことが出来ない。

また中学高校の吹奏楽部で主力となっている女子の在籍者数位が少ない高専では大編成バンドを組むほどの部員数(50人程度)を確保することが概して困難である。そのため2008年では県大会を突破しブロック大会まで大編成でコマを進めた高専は福島、豊田、松江、米子、都城の5高専にすぎなかった。⁷⁾

こうした課題を抱える高専においてはコストがかかりA J B Aコンクールでの上位入賞が難しくPR効果が認められにくい吹奏楽部を学校単位でサポートすることは厳しい状況にある。

4 都城高専吹奏楽部の活動

4.1 都城高専吹奏楽部の現状

上述したような全国の高専の吹奏楽が課題を共有する中、都城高専吹奏楽部は健闘している団体の一つであると思われる。

また本校吹奏楽部はA J B Aコンクール宮崎県予選に昭和32年から平成22年までの間に通算して29回の県大会に出場しており、うち宮崎県代表として20回の九州大会出場を果たしている。

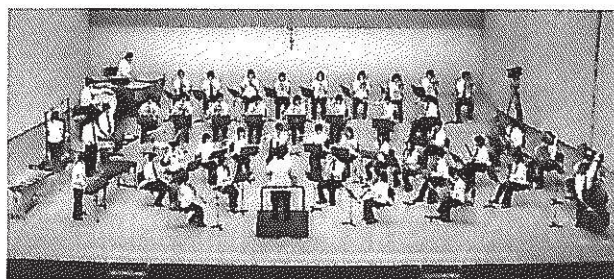


図2 コンクール演奏風景(2009年)

そして2010年度4月現在、部員数は56名であり、都城高専における最も部員数の多い部活動の一つとなっている。学生数が871名の本校において、全校生徒中吹奏楽部の部員が6.4パーセントを占める。また吹奏楽部部員56名のうち36名(64.2パーセント)が中学時代に吹奏楽部にて活動

経験を持つ。しかし、断っておかなければならないのは他高専吹奏楽部からも羨ましがられるこの部員は偶然集まったものではなく、積極的な地域貢献活動の賜であるという点である。これらの経験者学生は本校を受験した動機の一つに吹奏楽部の存在を挙げている。⁸⁾

4. 2 地域貢献活動

都城高専吹奏楽部は A J B A コンクールの出場、定期演奏会といった活動に加えて多くの地域貢献活動を行っている。地元のイベントへの出演、病院での慰問演奏、小中学校での演奏などこれらのイベントが相乗効果呼び起こし、定期演奏会を含むそれぞれの演奏会で多くの観客を呼ぶようになった。特に都城市内で本校吹奏楽部の人気は高く、老若男女を問わず多くのファンを獲得することになり都城地区を代表する吹奏楽団体の一つにまで上り詰めた。

表 2 都城高専吹奏楽部年間スケジュール

| | |
|-----|----------------------------|
| 4月 | 入学式、1年生対面式演奏 |
| 5月 | 石山小学校にて楽器指導、課題曲クリニックモデルバンド |
| 6月 | 沖水中学校にて楽器指導 |
| 7月 | 吹奏楽コンクール県大会出場 |
| 8月 | 吹奏楽コンクール九州大会 |
| 9月 | 都城地区吹奏楽祭出演、吉尾公民館敬老会出演 |
| 10月 | 沖水中学校定期演奏会賛助出演、ジョイントコンサート |
| 11月 | 文化祭(高専祭)、都城地区吹奏楽祭出演 |
| 12月 | 定期演奏会、アンサンブルコンテスト |
| 1月 | 都北地区スプリングコンサート出演 |
| 2月 | 定期演奏会 |
| 3月 | 卒業式演奏、J A 都城祭り出演 |

※年度によって老人ホームからの依頼演奏、複数の学校からの指導依頼を受けることもある。

表 2 に示した通り、本校の吹奏楽部では一年間の年間スケジュールの中に多くの地域貢献活動を計画している。また同時に、2008年度からは本校への進学を希望し、かつ吹奏楽部に入部を希望する学生向けにパンフレットを作成し配布することを開始し、定期演奏会の模様を収録したDVDを各学校の音楽に配布するといった高校の有力吹奏楽部が行っている作業を行うようになった。

吹奏楽部の裾野は野球部同様に広く、地区ブロッ

クの有力校として著名な本校吹奏楽部で活動することを受験動機の一つとする学生も多い。また部員の多くが女子学生であることから、高専の女子学生のアピールに一役買っていることも特筆すべき点であろう。各種演奏会は高専に進学する女子学生の存在を広くアピールするまたとない機会の一つとして機能しており、演奏会の後に女子中学生の保護者から進学相談をうけることも多い。吹奏楽部の活動は高専の志願者を安定化することにも一役買っている。

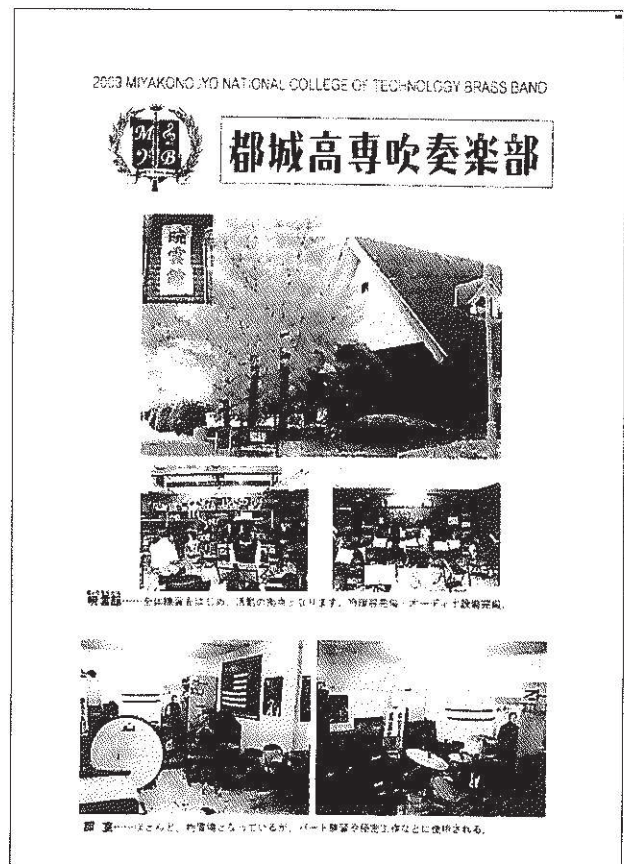


図 3 吹奏楽部作成パンフレット (2009 年)



図 4 石山小学校での指導風景

4.3 吹奏楽部活動の人的資源

こうした本校吹奏楽部の活動を語る上で指導者である下田克久の存在を欠かすことはできない。本校吹奏楽部はもともと九州大会の常連校ではあったが、部員も平成13年度には部員数も18人まで落ち込み廃部の危機にあった。

そうした折、付近の企業に勤務する下田が常任指揮者として積極的に関わるようになった。下田は高専だけでなく付近の小中学校及び大学、社会人を含む宮崎県内全ての吹奏楽の状況に明るく、県内で多数の指導をしている人物である。吹奏楽の世界ではアマチュアの音楽家であっても音大卒、指導者の能力を持つ市民は少なからずおり、音楽担当教員のいない本校においてまさに救世主的存在となった。それは単に音楽的指導のみならず、他校吹奏楽部との横の連帯を強めるといったことでも力になり、さらに複数の団体との交流が進んだ結果、宮崎大学吹奏楽部、都城陸上自衛隊音楽隊、そして本校吹奏楽部卒業生の指導により、学生達はますます安定した技術を保てるようになった。また楽器不足の問題についても、OBを含む多楽団からの楽器の貸し借りができるようになったことから演奏することができるレパトリーも増えた。



図5 都城JA祭での演奏風景(2009年)

5 結論

今日までの高専の地域貢献活動は、その内容が工学という教員のフィールドに特化すればするほど高専を受験する15歳以下という最もアピールしたい層に高専の活動が伝わりにくくなっているという皮肉な結果も生み出している。しかしながら上述した下田の例のような地元の人的資源を積極的に高専の内部に取り組み、学生をPR活動の中心に据え、地域住民と同じ目線で学術以外の立場からも親しみや

すさをアピールすることもまた十分に地域貢献活動たり得る。高専から発信するだけでなく、地域の有識者を高専内部に取り込む吹奏楽部の活動は結果的に最も有効な地域貢献活動の一つとして冒頭に挙げた沖水教育特区構想の中核の一部を担うことになったのもそれが大きな理由の一つである。

結果的にはあるが、本校吹奏楽部は学内の部活動としてコンクールでの成果を上げつつ、地域貢献、社会貢献、そして高専のアピールにうまく関わることができた。これまで教員が中心となっていた広報活動から学生も加わった広報活動へとターニングポイントを迎えたといえる。

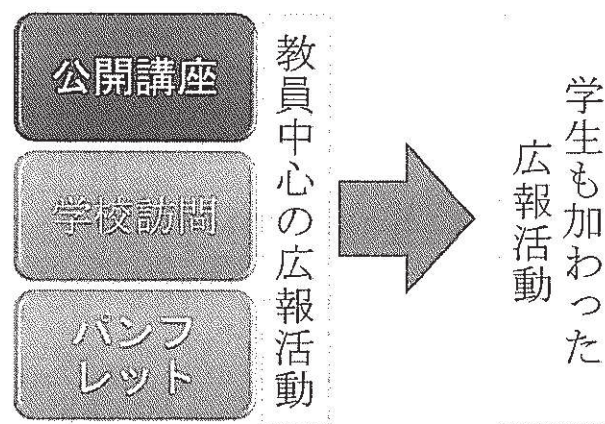


図6 高専広報活動の転換

このような吹奏楽部の活動には人的資源としての指導者・教員の存在があったことはもちろんである。だが吹奏楽そのものがわかりやすいことにも理由があったと考える。JA都城まつりや老人ホームの七夕まつりでは演歌を演奏し、学生が多い時にはポップス、ジャズを演奏するなど臨機応変に曲を演奏することができ、高専に進学しようとする中学生に直接的・間接的に良い評判を伝えることを可能にした。もちろんPR活動だけでなく、学生にとっても会場に出向いて喜んでくれる地域の方々の笑顔を見ることは学生にとっても活動の励みになったようである。地域貢献活動は学生指導の面でも良い効果を生み出したといえることができる。

もちろんこうした吹奏楽部の活動にも課題は残る。部員の増加を吸収できる練習場所の確保は相変わらず頭の痛い問題であるし、近辺からの騒音苦情にも対応しなくてはならない。女子学生の占める割合が高いことから早朝練習、延長練習に伴う登下校での防犯について注意が必要でもある。また運営コストがかかることから楽器の確保、予算削減が進む中定期的なメンテナンス代を十分に確保できないという問題は解決できずにいる。しかしながらこうした課

題を抱えながらも吹奏楽部のPR効果は十分にあり、地域貢献活動のみならず高専志願者の安定に大きく貢献している。今後他高専においても地域貢献活動の核として、また小中学生へのアピールとして積極的に吹奏楽部を活用してもよいのではないだろうか。

参考文献

- 1) 富樫鉄火：一音入魂！全日本吹奏楽コンクール名曲・名演50，河出書房新社，2007
- 2) 宮崎県吹奏楽連盟：宮崎県吹奏楽連盟創立五十周年記念誌，2005
- 3) 斎藤好司編：明解音楽小辞典—オーケストラ・吹奏楽のための，ドレミ楽譜出版社，2005

注

- 1) <http://www.kosen-k.go.jp/information/mokuhyo191226.pdf>
- 2) Ibid.
- 3) <http://www.miyakonojo-nct.ac.jp/news/data/21okimizukyoikuproject.htm>
- 4) 2008年10月1日現在小学校、中学校、高校、大学、職場、一般を合わせて14,182団体が加盟している。
- 5) これまでこうした吹奏楽部の活動は野球部ほどの注目を浴びてはいなかった。この数年になり注目を浴びるようになった原動力となったのは映画『スウィングガールズ』（東映2004年9月11日公開）のヒットと2004年から2005年に日本テレビ放送網で放映された『笑ってコラえて!吹奏楽の旅』の存在が大きい。中でも『笑ってコラえて!吹奏楽の旅』ではAJBA高校の部全国大会常連校の練習風景が紹介され大きな反響を呼んだ。
- 6) 一般に吹奏楽では15人以下の編成を小編成、30人以下の編成を中編成、50人規模を超える編成を大編成と称する。
- 7) ブロック大会の開催要項は各ブロックによって異なっており、AJBA北海道支部では小編成で地区ブロック大会に進むことが許されており、例年小編成の高専バンドが道大会にコマを進めている。しかしAJBA全国大会ではこうした小編成バンドのコンクール部門を今後撤廃していく方針を明らかにしている。
- 8) 部内アンケート。2009年4月実施。